

こひしさにたえずやあるらん君かおもと

夜毎くのゆめに見るなり

梅 同

にははすは誰かは知らんしら雪の

なかに咲きたる梅の初花

紀元節のあしたに さくら

大御代のすかたなるらん日の丸の

はた立てる門に梅の花さく

紫や聖書にはさむ壺すみれ
蛙なく壬生のほづれや居士か家
春の野に花かんざしを拾ひけり
出代りや白髪の僕忠にして
春草や女の子生れし海人か家
春の雪笠の乗と成りにけり
淡雪の空薄墨に暮にけり
草むらに顔を出したる蛙かな
猿澤の池の柳やおぼる月
山門の庇に蜂の巣くひけり
南の小川を限る焼野かな
野を焼て更に茨のとげくし
寫眞器を携帯したり春の旅

涼二芝稲文湖鯉箕受菰鵜遊移
月樓水村友月村山櫻堂堂魚雪

おちんを海苔についで頂戴な
見送りて別る橋下や春の水
夕風や霞の中の玉津島
文机に土筆を並べ寐入けり
勝鶏の血沙滴る蹴瓜かな
木母寺を漕き出す船や朧月
春風や一眸八百八十寺
奥様は花見がはらの墓参かな
鶯や梅津の里の朝ほらけ
田螺さる繩の帯せし男かな
摘む芹の根よりも白き腕かな

長野盲人學校生徒俳句

飯島八千溪

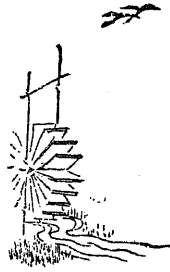
春夏秋冬

夕暮の鐘の音冴ゆる寒さ哉
足袋穿いて幾度下駄の脱んぞす
重着も軽く感する寒さ哉
軒垂れの音もやみたる寒さ哉
まだくさ探り樂しむ梅の花
一本の杖を力や菊の花
鶯に春の誠を覚えけり
あなたまあ此所へお出でよ梅香る

閑玉鬼さ 禾緑松郊 聽圓弦
菴浦水 ぼけ 黝 坡 軒 外 瀧 係 月

祖山 同 同 同 同 同 同
みつえ女 まさ女

足袋穿いて彼岸参りの初御堂
埋火の消えたる夜半の寒さ哉
手すれたる點字の板や身にしみる
かけそこねく足のこぼせかな
點字やめて手をあぶりたる火鉢哉
ながし來て火を掘り立てる炬燵哉
梅の花ごんな色して香るやら
五人して炬燵争ふ一間かな



大 傳 嘉 喜 近 小 伊
島 田 平 作 藤 山 比
う め 女

女子の貞操を責むるに急なる日本は、遂に男子の貞操を忘れたるが如し。男子に對する貞操は、女子唯一の婦徳として、授けらる。而も女子に對する唯一の男徳を男子に授けざるは何ぞや。妻となりての義務は、女學校脩身の唯一の課程なり、併も男子の學校に於て夫としての義務を授くるを聞かず。吾は、男女道徳の標準此の如く、均衡を得ざるものあるを見ず。

男子の貞操

説林

